

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

現代移民の多様性：滞日スィク教徒の寺院と信仰：
東京のグルドゥワラーから考える移民と宗教との
かかわり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東, 聖子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001171

滞日スイク教徒の寺院と信仰

—東京のグルドゥワラーから考える移民と宗教とのかかわり—

東 聖子

1. はじめに

近年、インドに対する関心が高まっている。IT産業の発達や著しい経済発展、その一方で埋まらない貧富の格差などがとりあげられていることが多い。グローバルな市場経済におけるインドの影響力について、政治的、経済的関心のもとインド国内の状況、他国との関係が説明されている。

しかし、このように伝えられるインドとは異なる視点で、インドをみていくことが可能であるし、また必要ではないだろうか。それは日本に暮らすなかで遭遇する「身近なインド」、「日本のなかのインド」についてである。日本に暮らすインドの人々、彼／彼女らのコミュニティについて知り、「身近なインド」、「日本のなかのインド」について考えることは、インドに対する新しい視点を獲得するだけではなく、日本におけるインドの人々の営みをとらえて、「移民とともに変わる地域と国家」について考えることにつながるだろう。

日本に在住するインドの人々の生活をみていくと、彼／彼女らの生活慣習が信仰および宗教と深く関わっていることに気づく。服装やアクセサリーなど何をどう身に纏うか（装い）、何をいつ、どのように食べるのか（食事）、どのことばを話し、どの文字で記すのか（言語）、子どもに何を、どのように教えるのか（教育）などは、信仰という観点抜きで説明するのは難しい。

では、「移民とともに変わる地域と国家」と滞日インド人の宗教はどのような関係にあるのだろうか。本稿では、著者が2004年秋から2007年春にかけて行なった滞日スイク（Sikh）教徒移民の調査をもとに、スイク教徒移民の寺院と信仰、コミュニティのありかたなどに着目する。そのなかでもとくに、東京のスイク教寺院に集まる人々について考察し、彼／彼女らの信仰がどのような意味をもっているのか、さらに、寺院での信仰や慣習の実践が、どのような「地域性」¹⁾を生み出しているのかを明らかにしたい。

まずはスイクおよびスイク教徒について簡単に説明することから始めよう。

2. スイクについて

スイク教はインド亜大陸西北部に位置するパンジャブ（Punjab）地方で生まれた

教えである。開祖のナーナクを含む10人のグル（師）および聖典グル・グラントの教えに基づく宗教であり、スーフィズム（イスラーム神秘主義）、ヒンドゥー、イスラームの影響を受けながら15世紀半ばから16世紀にかけて成立した。セワ（奉仕）を行うことをとおして、社会への貢献ができるとされており、セワを励行すべき信仰実践としている。また、5K（切らない髪や髭、それらを梳かすための櫛、腕輪、刀剣、ショートパンツ）がシク教の象徴的な装身具となっている。寺院ではランガル（共同食堂：来訪者全員が同じ食事をとること、およびその場）が設けられる。教典はパンジャブ地方の言語であるパンジャービー語で記されており、第2代目グル・アンガト（Angad）が考案したとされるグルムキー（Gurmukhi）文字が用いられている。また、女性はコウル（Kaur）、男性はシン（Singh）という名を名乗る²⁾。

インドにおけるシク教徒人口は2%弱であるが、北インドのとくにパンジャブ州に多く住んでいる³⁾。また、イギリス、カナダ、アメリカ、東南アジアにも多くのシク教徒が移り住んでいる⁴⁾。

2.1. 日本でシクを信仰する人々

2.1.1. 日本にあるシク教寺院——神戸と東京のグルドゥワラー

では、日本でシクを信仰するのはどのような人々なのかみていくことにする。日本には神戸と東京にシク教寺院・グルドゥワラー（Gurdwara）がある。神戸のグルドゥワラーは1960年代から続いており、週に2度の礼拝集会時以外も常時開放されている。多くの人は寺院近辺に住んでいる。一方、東京のグルドゥワラーは1999年に設立され、礼拝で人々が集まるのは月に1度のみである。神戸のように寺院周辺に集住しておらず、東京やその近郊に散在している。そして、グルドゥワラーを訪れるのはおもに、パンジャブ地方を民族的出自とし、シクを信仰する人々（パンジャービー・シク）である。

2.1.2. スインディーとパンジャービー・シク

パンジャービー・シク以外にも、シクを信仰する人々がいる。パキスタンの東南部に位置するスindh（Sindh）地方出身の人々（スインディー⁵⁾）である。彼／彼女らは横浜、沖縄、神戸などに集住し、独自の寺院をもつ。日本に暮らすスインディーの人々はヒンドゥー教徒とされているが、ヒンドゥーの神々だけではなくシクへの信仰ももち合わせている。そのため、寺院にはヒンドゥーの神像とシクの聖典グル・グラントが並べられている。神戸のスインディーは、グルドゥワラーで行われる礼拝集会にも参加している。また、横浜のスインディーも東京のグルドゥワラーを訪れる。「シク」および「シク教徒」というカテゴリーが用いられる際、一般的にスインディーの人々はそのなかに含まれていない。本稿においても「シク」お

よび「シク教徒」と呼称する場合、スインディーは含まず、パンジャービー・シクのみを指す。

パンジャービー・シクもスインディーも、宗教的行事がある際には、シク教の司祭をインドから呼びよせ、儀礼を執り行っている。沖縄のスインディーに呼ばれた司祭が、沖縄での祭礼執行を済ませた後、東京のグルドゥワーラーや横浜のスインディー寺院で祭事を行ったりする。

スインディーとパンジャービー・シクというエスニシティの違う両者を結びつけるのは、インド亜大陸を故地とするインド系移民であるという共通性⁹⁾、さらに信仰の共有である。けれども、母語の違い、それぞれの寺院における儀礼の行い方の違い、居住地の違いなどが、アイデンティティ／帰属意識の差につながっているのである。

インド系移民のなかでパンジャービー・シクとスインディーは、信仰を共有していることで、独自の関係性をつくりだす。しかし同時に、信仰実践における差異が、パンジャービー・シクかスインディーかというアイデンティティの違いを際立たせることになる。

次に、東京のグルドゥワーラーとそこに集まるパンジャービー・シクについて、神戸との比較も交えながら説明する。東京およびその近郊に暮らすシク移民と東京のグルドゥワーラーおよびそこで行われる実践がどのようなものか、具体的にみていくことにする。

3. 東京のグルドゥワーラーとそこに集まるシクたち

3.1. 東京グル・ナーナク・ダルパール (Tokyo Guru Nanak Darbar)

3.1.1. 東京のグルドゥワーラーのはじまり

東京のグルドゥワーラーである東京グル・ナーナク・ダルパールは1999年に設立された。毎年4月には、カールサー(1699年に第10代目のグルであるゴービンド・シンが、ムガル帝国による異教徒弾圧に抵抗するためにつくった武装するシクの集団。現在は戦闘のための武装をしていないが、グルドゥワーラーでの入信式を経た人はカールサーの一員となり、5Kの常時着用などを守らなければならない)の誕生をシクの人々が祝うが、1999年はその300周年であり、世界各地で盛大な祝祭が催されたという。このとき関東に住んでいるシクたちが、あるシク教徒の運営するレストランに集まり、そこで初めて東京で礼拝が行われたという。その際「これから定期的に集まって礼拝ができないだろうか……」という話がなされたのが、東京のグルドゥワーラーの始まりである。はじめは、あるインド人が所有する東京のマンションビルの一室を借りて、そこで礼拝をおこなっていたが、月々の賃貸料が高く、それならば購入してしまったほうがいいということで、その一室を購入し、そこが現

在のグルドゥワラーになっている。

3.1.2. 地下室からグルドゥワラーへ

グルドゥワラーとなっている部屋は、都心にあるマンションビルの地下にある。1階以上は店舗や住居部屋となっており、マンションの住人は1つの入り口から出入りするが、そこはグルドゥワラーの出入り口ともなる。そのため、この出入り口には地下がグルドゥワラーであることを示す目印のようなものは何もない。共通の出入り口の奥に地下につながる階段があり、そこを下って初めてスィク教の寺院であることが壁に貼られたポスターにより分かる。礼拝が行われているときのみ、グルドゥワラーであることを示す旗がビルの共有出入り口に立てられるが、礼拝終了後には部屋の中にしまうことになっている。礼拝集会以外の時間は、寺院入り口のドア（部屋のドア）には鍵がかけられ、出入りすることができなくなる。

インドの一般的なグルドゥワラーでは、グルドゥワラーの建物より高い旗が常時立っており、遠くからでもそこにグルドゥワラーがあるということが分かるようになっている。また、礼拝が行われていないときでも、24時間自由に出入りすることが可能である。

ビルの管理人である日本人夫妻はグルドゥワラーの運営を中心的に担っている人々（後述）に対してビルの利用規則等を説明し、グルドゥワラー運営側から管理人に対しては礼拝集会の趣旨説明をし、両者の合意の下で月に1度、日曜日に礼拝集



写真1 東京のグルドゥワラー入り口



写真2 東京のグルドゥワラー内での礼拝模様

会が行われている。

一方、神戸のグルドゥワラーは、住宅街の中にある。2階建ての一戸建て住宅を改造し、1966年代から現在までグルドゥワラーとして使われている。目印となる旗は常時外に掲げられている。インドにおけるグルドゥワラーと同様、24時間誰でも出入りできる。建物全体がグルドゥワラーであり、宗教法人として登録されているため、礼拝集会やそのほかのイベントなどが自由に企画され、催されている。毎週金曜日と日曜日に礼拝集会が行われているが、そのほか毎朝夕にグルドゥワラー常在の司祭が礼拝を行っている。礼拝集会時のランガルの準備、片付けは、日本人女性らによって行われている。彼女たちはグルドゥワラーに集まる人々に信頼され、ランガルの支度等を任されている。

3.1.3. グルドゥワラーにかかわる日本人との関係

東京のスィク教寺院では、同じビルの住民や管理人の「目」をつねに意識し、また、あたらしいことをする際には、許可を得なければならない。そのような「周りの日本人」の存在が、グルドゥワラーとして一室を購入したにもかかわらず、自由にその部屋、つまり寺院を使いにくい、もしくは使えないという状況にしている。管理人や住人とのあいだに問題を抱え、仲違いをしているというわけではないが、日本人がスィクの礼拝集会やグルドゥワラーの運営を積極的に支援しているとは言いがたい。それとは対照的に神戸では、グルドゥワラーで手伝う日本人女性たちが、多いときには100人近く集まるランガルをうまく「さばく」ためには欠かせない存在となっており、彼女らは神戸のスィク教寺院を強力に支援しているといえよう。

3.1.4. 「神戸のスィク」と「東京のスィク」の違い

このような東京と神戸の差は、同じスィク移民でも、どのような背景で来日し、暮らしているのかに違いがあるからだと考えられる。神戸に住むのは、日本に定住することを念頭に来日した貿易業を営む人々とその家族である。その他の職業についている人はほとんどいない。神戸に住む2世以降の女性は、日本国外のスィク・コミュニティの男性と結婚し、結婚後神戸を離れるが、彼女らの出身地は神戸となる。2世以降の男性は逆に、国外のスィク・コミュニティから結婚相手呼び寄せする。このようにしてコミュニティ⁷⁾を基盤とした生活を送り、定住、永住しているのが神戸の人々である。彼／彼女らの多くは寺院から徒歩圏内に集住し、数世代にわたりコミュニティを維持し続けている。このようなバンジャービー・スィクたちの神戸での営みが、周囲の日本人たちにも認知されているからこそ、神戸のグルドゥワラーにおいて日本人とスィク移民との積極的なかわりがみられるのではないだろうか。

一方、東京およびその周辺に住むスィク教徒の多くは、数年間の一時的な滞日を念

頭に来日する。コミュニティの中心となりえるグルドゥワーラーはあるが、神戸とは異なり、寺院周辺に集住していない。また神戸に比べ滞日期間が断然短いため、帰国者と新たな来日者の入れ替わりが早い。このような状況では、グルドゥワーラーでの礼拝集会を中心とした周辺の日本人住民を含むかたちでのコミュニティの発展は難しいと考えられる。

ではつぎに、東京の寺院を訪れるスイクたちについて詳しくみてみる。

3.2. 東京のグルドゥワーラーに集まる人々

3.2.1. 居住地と職業

グルドゥワーラーでの礼拝集会を訪れる人々は、東京および東京周辺に在住している。埼玉、千葉、神奈川、茨城、群馬から電車や車で1時間以上かけて寺院に来る人がほとんどである。関東地域においてバンジャービー・スイクが集住している地域はなく、仕事場との距離や家賃の相場などから居住地を決めている。

東京都内や川崎に住む人の多くはIT技術者である。家族で滞在している場合公団アパートという比較的安い部屋に暮らしていることが多く、独身者の場合は公団アパートではないマンションに同じ職場の友人とルームシェアをしている場合が多い。職場から家までは電車で数駅という近さで、駅から家までの移動を考えても、通勤時間は1時間以内に収まっているようである。

群馬、千葉、神奈川西部、埼玉、茨城は、工場の工員や建設作業員として働くスイク教徒が多い地域である。会社のアパートや、会社敷地内の建物内に住んでおり、同僚と同じ部屋で生活している人も多い。家族滞在者は少なく、単身で来日している男性がほとんどである。

貿易業や旅行業など自身で会社を経営している場合は、都内にオフィスと住居をもっている。家族滞在者がほとんどで、子どもは都内のインターナショナルスクールに通う。彼／彼女らは、日本に定住し、永住することも視野に入れて生活している。東京のグルドゥワーラーに集う人たちのなかで、日本での定住や永住を考えているのは、これらの人たちのほか、日本人配偶者をもつ人たちのみで、その割合は少ない。

上記以外の職業に就くスイクの居住地については、とくに特徴的な傾向はないようであるが、職場から住居までの距離が離れ、通勤に時間をかけている人はあまりいない。

東京近辺の滞日スイク教徒が就く仕事をみると、多様な職種に就いていることが分かる。教師、IT技術者、工員、建設作業員、旅行会社経営、貿易、レストラン経営、調理師、など多岐にわたる。日本において職場と家を往復する生活を送っている人がほとんどである。休日は家族と過ごしたり、同じ職場の人たちと出かけたりするため、異なる仕事に就き離れた場所に住む人々と交流する機会はあまりない。このよ

うな事情から、月に1度の寺院訪問が普段交流することのない人々と知り合うきっかけとなっている。神戸のグルドゥワラーに集まる人々が、ほぼ全員顔見知りの関係であるのとは対照的である。

3.2.2. 出身地・ことば

彼／彼女らの多くが、自身がパンジャービー・スィクであるという共通意識をもっている。しかし、同じパンジャープでもそれぞれの出身地は異なるし、その違いによって、共通の母語であるパンジャービー語での会話において方言の差が出てくる。お互いの意味が通じないことはないが、話しことばの違いが、出身地の違いをさらに認識させる。また、インド国内においてパンジャープから他州へ移住し、そこから日本に来ている人もおり、その場合、インドのパンジャープ州において用いられているグルムキー文字を解さないことが多い。東京のグルドゥワラーで見られる文字表記の多くはグルムキー文字を用いているため、内容を理解できない人々が、疎外感を覚えることもある。

3.2.3. 装い

5Kにみられるように、スィク教徒の信仰と装いは密接に関係していると考えられる。東京のグルドゥワラーに来る人々の服装や身につけている装飾品をみると、あまり統一性はみられない。男性においては、ターバンの有無、またターバンの巻き方、インドで着られているクルター (Kurta) とパジャーマー (Pajama) か洋装か、洋装であってもスーツかTシャツとジーパンかなど、さまざまな装いをみることができる。女性の場合、ほとんどがインドで着られているパンジャービー・スーツを着ているが、どのようなアクセサリを身につけているかなど、装飾品には違いがある。このような装いの相違は、個人がグルドゥワラーでの礼拝に参加することをどのように考えているのか、またどのように参加するのか、と関係している。「礼拝に顔を出した後に出かける用事があり、その用事のために今日は特別にスーツを着てきた」という人もいれば、「月に一度しかない礼拝集会なんだから、いい格好で行きたい」と毎回スーツを着てくる人もいる。普段はしていないターバンを、礼拝集会時には持参し、着用する人がいる一方、普段と変わらない姿で寺院を訪れる人もいる。5Kをかたどったペンダントを身につけている人、5Kのひとつであるカーラーを身につけている人、信仰とは全く関係ないものを身につけている人などさまざまである。スィク教において、ターバンや5Kなどを装うことが信仰実践そのものとなっているが、信仰と装いの結びつきを強く認識しているか、していないかは人それぞれなのである。つぎに、東京の寺院で行われている信仰および慣習の実践について述べる。

3.3. グルドゥワーラーでの信仰と慣習の実践

3.3.1. チャーイ

グルドゥワーラーに来た人は、礼拝に参加する前に、まずチャーイ（砂糖入りのミルクティ）をすすめられる。チャーイを飲みながら会話をする時間をつくるのが東京のグルドゥワーラーでは重要視されている。なぜなら、グルドゥワーラーを訪れる人の多くが、礼拝時以外会うことがなく、顔を見ながら近況を報告したり、日本での生活に関する情報を交換したりすることがないからだという。また、礼拝集会に初めて来る人が毎回おり、互いの自己紹介をする必要があるためチャーイをすすりながらの会話が、人をつなげるために必要不可欠な要素となっている。チャーイを飲みながらの歓談は、インドの日常においてよく見られる光景であるし、またチャーイは朝、休憩時、食後にと欠かせない飲み物である。東京のグルドゥワーラーにおいてチャーイをつくり、ふるまい、飲みながら会話するのは、彼／彼女らの出身地における慣習の実践といえよう。

3.3.2. 礼拝、キールタン、カラー・パルシャード、ランガル

グル・グラントが開かれ、読誦が始まる。読誦するのは毎回同じ人物で、東京のグルドゥワーラーに来るスィクたちの中で、カールサーへの入信式を済ませているのは彼と彼の妻のみだという。読誦後にはみなでキールタン (kirtan) と呼ばれる賛歌を歌う。その後、彼が最近のニュースや話題をスィクの教えと絡めながら説く。それらが終わると、カラー・パルシャード（小麦、砂糖、水、精製バターを火にかけてながら混ぜ合わせたもの）が全員に配られ、後にランガルが始まる。

3.3.3. セワ

グルドゥワーラーでの清掃、ランガルの準備・片付け、ランガルでの給仕、チャーイの給仕などはセワと呼ばれ、スィク教において重視されている奉仕（活動）を意味する。誰がどの仕事を担当するというような役割分担はとくになく、やりたい人が自由にセワをする。セワをしないからといって咎められたりすることはないが、セワを積極的にする人は、しない人に比べ高く評価されているようである。東京のグルドゥワーラーでも、集まる人々によってセワが行われており、礼拝以外の信仰実践と捉えることができる。さらにセワへの参加度や内容が、東京のグルドゥワーラーにおける個人の影響力に関連していると考えられる（後述）。また、セワをとおして訪れる人々のあいだの親睦が深められることが多い。

では、このような慣習・信仰の実践およびそれらが行われている東京のスィク教寺院は、スィク移民にとってどのような意味をもっているのだろうか。以下では、東京のグルドゥワーラーやそこで築かれる関係性に着目し、宗教が移民にどのような影響



写真3 チャーイを飲みながら歓談



写真4 ランガルと給仕のセワ

を与えているのかを考察する。

4. 寺院と信仰実践が与える「機会」

4.1. 「集合」と「分散」

今までみてきたように、東京のグルドゥワラーは、異なる背景をもつ人々が集まる場所となっている。居住地や職業の違う人同士が知り合う機会は、グルドゥワラー以外にはあまりないと考えられる。そのような人々が、月に1度の礼拝集会のために寺院を訪れ、プログラムが終わると帰っていく。子供の誕生日会やインドの祝祭などがなければ、1ヵ月後の礼拝集会まで会うことはない。寺院で親しくなったとしても、インドに帰国したり海外へ再移住した後まで関係が続くことはほとんどない。東京のグルドゥワラーを訪れることで、新しい知人を得るが、寺院外でその関係が発展することはあまりない。礼拝が終われば、それぞれの居住地に帰り、同じ職場や近隣に住む人以外とはあまり関わらない生活に戻る。東京のグルドゥワラーは、普段関係をもたない人々が、スィクへの信仰という紐帯によって集まり、またそこから散っていく場、つまり集合し分散していく場となっている。

4.2. セワによる関係構築

4.2.1. セワの「内訳」

東京のグルドゥワーラーにおけるセワの内容には以下のようなものがある。聖典の準備（礼拝時以外は棚にしまわれているグル・グラントを出し、経典台の上に置く。その際、経典台にはグル・グラントのためのきらびやかな布やクッションを敷き、台の上に天蓋を飾る。）、儀礼の進行（経典を読み、カラー・パルシャードに刀剣を通すなど）、賛歌（キールタン）での楽器（ハルモニウムやタブラ）の演奏、ランガルの食事づくり・給仕、ランガル後の片付け、礼拝前後の清掃、チャーイの給仕などさまざまなセワがある。

このなかでも礼拝の進行やキールタンなどは特別な技能を要するため、誰もが行うことができるわけではない。東京のグルドゥワーラーに集まる人々のなかで、これらを行うことができるのは数人のみなので、その数人が毎回礼拝とキールタンを執行っている。調理や給仕、清掃などのセワは、普段それらに慣れていない人であっても、他の人を真似ながら行うことができる。これらのセワのなかでどのセワをどの程度行うか、またその行為を周囲に印象付けることが、グルドゥワーラー内での関係性に影響する。

4.2.2. グルドゥワーラー内での影響力

儀礼やキールタンを行う人たちは、一目置かれた存在となる。礼拝集会において参加者全員の視線が集まるなか、技能を披露することで周りの人々へ与えるインパクトは大きい。その他の誰もが行うことができるセワには、訪れた人のほぼ全員が程度の差はあれ参加する。そのなかでも毎回積極的にセワを行い、礼拝のプログラムをスムーズに進行させるためのセワの手順を把握している人たちがいる。どのセワにおいてもいつ、どのタイミングで行うかがプログラム進行のうえで重要であり、それを見極めて実際に進めていかなければ、礼拝集会はうまくいかない。その人たちは、他の参加者に指示を出すことや、積極的にセワを行っている姿を「見せる」ことをとおして、礼拝集会や寺院運営におけるリーダーシップを獲得している。

また、参加者の多くがプログラムの中心となる聖典の読誦、キールタン、ランガルなどの前後にグルドゥワーラーを出入りする一方で、リーダーシップを発揮し、影響力をもつ人たちは、礼拝集会が始まる前からランガル終了後の片付けと清掃が終了するまで、つまり礼拝集会の全行程において寺院内でセワをしている。他の人々に比べグルドゥワーラーでの滞在時間は長くセワに従事している時間も長い。これらの影響力をもつ人々を含め、東京の礼拝集会に集まる人々は、電車や車で1時間以上かけて寺院にやって来る。月に1度とはいえ、ランガルの準備のため前日の夜、仕事が終わってから寺院に行き、翌日つまり礼拝集会当日の夕方4時頃の片付け終了までグルドゥ

ワーカーでセワをするのは、「労力」のいることのように思われる。それを毎月続けているというその「労力」、およびセワにおいて周囲へ指示を出すことができるようになるほどの「経験」が、セワを積極的に行う人々の「評価」を高め、それが影響力の高まりにつながっていく。

4.2.3. グルドゥワーカー内独自の関係性

グルドゥワーカーにおいて影響力をもつ人々の職業をみると、建設作業員、工員、倉庫作業員となっており、女性はいない⁹⁾。会社経営者やIT技術者に比べ、経済的、社会的には「劣位」となっている人々が、東京の寺院においては、セワをとおして強い影響力をもつに至っている。寺院で構築される関係性には、誰がどのようにセワに従事しているかが反映されている。そしてその関係性は寺院外での「評価」とは必ずしも一致しない。礼拝集会に集まる人々のあいだにみられる独自の関係性がつくられており、その「機会」はセワというかたちの信仰実践により与えられ、実践の場であるグルドゥワーカーという空間⁹⁾により支えられている。

4.3. 東京のグルドゥワーカーにおけるアイデンティフィケーション

4.3.1. グルドゥワーカーでの葛藤

つぎにスィク移民のアイデンティティが、寺院および信仰とどのようにかかわるのかをみていきたい。まずそのために、これまでグルドゥワーカーに集まる人々が遭遇してきた葛藤について述べることにする。

異なる職業や出身地の人々が東京の寺院に集合するため、礼拝集会を開催するにあたり、どのような「やり方」をとるのかについて全員一致した意見を得るのは非常に困難である。出身地において彼／彼女らが行き慣れ、見慣れたグルドゥワーカーの記憶はそれぞれ異なっており、さらにそれぞれが考える東京のスィク教寺院像（どのようなスィク教寺院を理想とするか）も同じではない。それらは彼／彼女らの装いの違いにも象徴的に表れているといえる。マンションビルの地下をグルドゥワーカーとして利用するために、何をそろえ、それらをどう配置するか、また内装にどのように手を加えるかなどを考えなければならなかった。グル・グラントを中心とした礼拝空間、ランガルを準備するための調理場、礼拝中でも途中から来た人がチャイを飲みながら歓談できる場所、礼拝前に手足を洗う場所などを1フロアの1室のなかに揃えなければならず、どのようにそれぞれの空間を仕切り、作りだしていくのかについて、意見はバラバラであったという。1999年の寺院設立以降、礼拝集会や設備維持などについて対立しながらも、意見を「すり合わせる」努力をしながら運営してきた。

4.3.2. アイデンティティの共有と相違

しかしながら、関東に住むパンジャービー・スィクの人たちにとって、自分たちの集まることができる関東で唯一のグルドゥワラーをつくるという全員共通の思いから、それぞれの意見を「すり合わせ」ながら礼拝集会を続けてきた。このような過程をとおして、月に1度の日曜日に寺院を訪れ交流する人々が、「東京のグルドゥワラーに集うパンジャービー・スィク」としてのアイデンティティをつくりあげてきた。その際、チャイと会話という慣習実践の繰り返し、このアイデンティティ共有を導いた要因のひとつになったようである。けれども、同じスィクであるからこそ、信仰についての「考え方」や「やり方」が違うことを認識することになる。また、故郷での記憶から想起されるそれぞれのグルドゥワラー像およびスィク教徒像は一致しない。さらに、今まで述べてきたように、出身地およびことばに加え、日本での居住地、職業の違いなどがある。これらのことから、「自分は相手とは異なる」というアイデンティティの相違を認識する¹⁰⁾。このように、アイデンティティの共有と相違を意識する機会が寺院および信仰によって与えられる。そのような機会は彼／彼女らにとって、アイデンティフィケーションの一過程となっていると考えられる。

5. まとめ

グルドゥワラーをとおして—東京周辺のスィク教徒たちがつくる「地域性」

東京のスィク教寺院は、信仰実践の場として、東京および東京周辺に暮らすスィクの人々を集める。集まった人々はそれぞれ異なる社会的背景をもち、出身地やことばも異なるが、共通の信仰および「自分たちはパンジャービー・スィクである」というアイデンティティの共有をもとに、対立する意見を「すり合わせ」ながら東京の寺院をつくりあげてきた。それは集まる人々にアイデンティティの共有と相違とともに意識させる経験であり、彼／彼女らにとってアイデンティフィケーションの一過程となっている。

さらにセワという信仰実践が、日常における社会的地位や「評価」に基づかない関係性を、人々のあいだに築いている。この関係性はグルドゥワラー内において、また寺院および礼拝集会の運営についての話し合いがおこなわれる場において、顕著に現れる。

礼拝集会が終わり、グルドゥワラーから帰宅すると、同じ職場の仲間や近隣に住む人たちとのみ交流する生活に戻る人がほとんどである。つまり、寺院は人々を集め親交を深める機会を与えるが、そこを中心としたスィク・コミュニティを発展させているわけではない。

このように東京のグルドゥワラーやそこでの信仰実践は、関東地域に暮らすパン

ジャービー・スィクに「集合」と「分散」の場を与え、さらに独自の関係性をつくる機会やアイデンティフィケーションを経験する場を提供している。これらの特徴は、彼／彼女らの出身地においても、神戸においてもみられない。他でもない東京のスィク教寺院に集まる人々がつくりあげた「地域性」そのものといえよう。

寺院を訪れる人々の暮らし、寺院の設立場所、寺院や人々の置かれている状況、集まる人々などの要素が重なり、作用しながら寺院がつくられ、そこでの実践が行われている。つまり、東京およびその周辺に暮らすスィク移民という特殊性（彼／彼女らの移住背景、信仰、移住先社会、出身地とのつながり、彼／彼女らのあいだにみられる差異性や多様性、共通性、生活慣習などが作用し合って生まれると考えられる）が、東京のグルドゥワラーとそこでの実践に反映している。

このような独自の特徴が、東京のグルドゥワラーに集う人々がつくる「地域性」なのである。

以上のように、本稿でとりあげた東京およびその近郊に住むスィク教徒の事例をとおして、ある信仰をもとに人々が集まり、その信仰を実践するという宗教が、移民の移住先におけるあらたな場創出のきっかけや関係性をつくりだす機会を提供していることを明らかにした。さらに、そこでみられる実践における特徴が「地域性」の現れであり、東京のグルドゥワラーに集まるスィク移民のおかれている状況を反映していることを述べた。つまり、東京周辺に暮らすスィク教徒たちは、グルドゥワラーをとおして、「地域性」をつくりだしているといえよう。そしてこの「地域性」は「移民とともに変わる地域と国家」のひとつのかたちとして考えることができるだろう。

注

- 1) 本稿における「地域性」とは、「ローカリティ」(Appadurai 1996)を想定している。アパデュライはローカリティを「段階的、空間的なものというより、文脈的、関係的なもの」、「社会的直接性の感覚や相互行為の技法、文脈の相対性のあいだにみられる連結からなる複雑な現象学的属性」と捉えている(Appadurai 1996: 178-179)。さらに、「ローカリティがある次元や価値のように可变的に認識されている現に存在する社会形態」を「ネイバーフッド」と呼んでいる(Appadurai 1996: 178-179)。この「ネイバーフッド」は、「現実性や社会的再生産の可能性を特徴とする、状況づけられたコミュニティ」を指している。そして、ローカリティは、「ある特定の社会形態(ネイバーフッド)におけるローカルな主体による実践から現れてくる」(Appadurai 1996: 199)という。本稿では東京周辺に暮らすスィク教徒たちの信仰や慣習の実践からつくりだされる「地域性」——「ローカリティ」をみていくが、東京のグルドゥワラーに集まるスィク教徒を「東京におけるローカルな主体」とは言い難い。よってここでは、つくりあげられた「地域性」そのものについてはアパデュライの議論を参考とするが、「地域性」を生み出す主体がローカルであるかどうかは問わないこととする。
- 2) スィクについては保坂(1992)、コール・サンビー(1986)、シング(1994)を参考にした。

- 3) 2001年センサスによる。センサスについては Census of India および Census GIS India を参照した。
- 4) 世界各地のスィク教徒移民については Tatla (1999)。
- 5) 多くはパキスタンのスィンド州を中心とした地域に居住している。パキスタン国内の人口は約1,700万人(1993年)で、80%以上がスンナ派イスラーム教徒。ヒンドゥー教徒の割合は20%弱で、パキスタンにあってはやや高い。スィンディー語を母語として話す。インド側では主としてムンバイ(ボンベイ)やデリー、ラージャスターン州を中心に約260万人(1991年)が居住する。そのほぼすべてが1947年の印パ分離独立前後に移住した人々とその子孫であり、99%以上ヒンドゥー教徒。インド・パキスタン以外にも、東南アジア等に移民として暮らす人々がいる(綾部2000:327)。
- 6) 南アジア地域において、国境線により分けられた領土を保有する国民国家は、1947年のインド・パキスタン分離独立や1975年のバングラディシュ独立などを経て確立されてきた。このような国民国家の枠組みで分割される以前、つまり、イギリス植民地支配期の英領インドから世界各地に移住していった人々とその子孫たちの「起源」や「故郷」としての帰属意識は、現在の国家というカテゴリーに必ずしも合致しない。また、かつての英領インドから分離・独立して成立した個別の国々から発給された旅券を持ち、他国へ移住していった人々であっても、移住先において、南アジア地域に横断的にみられる言語や宗教、慣習などの共通性を、異なる国からやってきた人とのあいだに見出すこととなる。このような背景から、南アジア出身の移住者とその子孫を「インド系移民」と総称することが可能である。「インド系移民」としての共通の歴史や経験をふまえ、個別のエスニシティにもとづく視点だけではなく、South Asian Diasporas としてみることの意義について、シュクラ(Shukla 2003)が論じている。ここでの「インド系移民」とはシュクラの「南アジア人ディアスポラ」とほぼ同義であるが、本稿においてもシュクラ(Shukla 2003)においても、このような呼称の対象となる人々が、同質的な存在であることを意味していない。
- 7) ここでの「コミュニティ」とは、「非同一性による共同性」(大杉2001)や「生活の場に根ざした共同体」、「変異する共同体」(松田2004)などにみられる共同体の特徴をそなえているものである。しかしながら、「スィク・コミュニティ」が他のコミュニティとどのようにかわっているのか、また「スィク・コミュニティ」を社会のなかでどのように位置づけられるのかなどについては、これらの共同体論では説明しきれないと考えられる。その際、「南アジア人ディアスポラ」(Shukla 2003)(注6参照)や「トランスナショナルコミュニティ」(Kearny 2004)といった概念を用いて、「スィク・コミュニティ」のコミュニティ外部とのかかわりを考察することができるだろう。
- 8) 積極的にセワを行う人のなかには女性もいるが、グルドゥワラー内では影響力を与えるほどの人はいない。ジェンダーにもとづく関係性や行為などについては、機会を改めて述べることにする。
- 9) 空間については(西井2006)および(セルトー1987)を参考にしている。「……空間は権力関係のなかでスケールを伸縮自在にするものとして、人間の行為との関連で常に考えられている……。そうした『空間』概念で強調されているのは、場所で想定されていた主体的な意味空間ではなく、マテリアルなプロセス、フィジカルな空間とメンタルな空間が絡まり合いながら変化していく動態のプロセスとして把握されるということである。」(西井2006:4)。さらに、「従来の主観主義対客観主義、個人対構造という問題系の乗り越えを図りつつ、外からの視点により経験から遊離した全体へ還元することなく、行為の現場から記述を立ち上げることをめざす」のが「社会空間」論であるとしている(西井2006:10)。また、セルトー

は、「場所」が「もろもろの要素が並列的に配置されている秩序（秩序のいかんをとわず）」であり、「諸要素は、たがいに隣接関係に置かれ、ひとつひとつがはっきり異なる『適正』な箇所におさめられている」、つまり「すべてのポジションが一挙にあたえられるような布置のこと」であり、「そこには安定性がしめされている」という。一方「空間」については、「動くものの交錯するところ」であり、「たがいに対立しあうプログラムや相次ぐ諸関係からなる多価的な統一体として機能するようになる」とし、「要するに、空間とは実践された場所のことである」（強調本文）と述べている。本稿では、東京のグルドゥワラーを、これらのような「空間」として捉えている。東京のスィク教寺院を「空間」と考えることができるのは、東京のマンションビルの一室という立地にみられる地理的な「場所」性や、寺院に集まる人々の社会的属性にもとづく「場所」性が寺院においてみられるからである。「場所」としてのグルドゥワラーにおいて、さまざまな実践が行われることにより、「空間」としてのグルドゥワラーが立ち上がってくる。つまり、「空間」と「場所」はそれぞれ別個のものではなく、そこにみられる「場所」性を前提として「空間」的な特徴を見出すことができる。「空間」としての意味づけは、「場所」としての意味づけと対比するかたちでなされる。東京のグルドゥワラーの場合、日本人住民や管理人、近隣住民との関係の希薄さ、それぞれの居住地からの距離などにみられる「場所」性に対して、セワにもとづく「寺院内独自の関係性」や「アイデンティフィケーション」などが「空間」としての意味をつくりあげることになる。

- 10) 本稿における「アイデンティティ」は、「決して統一されたものではなく、最近においては次第に断片化され分割されている」、「決して単数ではなく、さまざまではしばしば交差していて、対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成される」、「根源的な歴史化に伴うものであり、たえず変化・変形のプロセスのなかにある」（ホール・ゲイ 2001: 12）、ものとして捉えるホール・ゲイ（2001）のアイデンティティ概念に基づいている。また、言説的アプローチをもって、決して完成されない構成作用、プロセスとして、つねに「進行中のもの」として、「アイデンティフィケーション」を位置づけている（ホール・ゲイ 2001: 9）。このようなアイデンティティやアイデンティフィケーションに関する考え方は、移民女性のアイデンティティについて考察しているターパンにおいても同様にみられる（Thapan 2005: 29, 31-32, 34-35, 55）。本稿でも、こうした立場からアイデンティティを捉えている。アイデンティティが状況依存的に認識されていること、つまり、多元的な帰属意識のなかから状況に応じて「選択」されるアイデンティティをそれぞれがもっており、その場面場面によって「選択」される様子を、本稿では「アイデンティフィケーション」と呼んでいる。ここでもホール&ゲイと同様、「アイデンティフィケーション」を「決して完成されない構成作用、プロセス」として捉えているが、それは時系列や精度的な尺度にもとづき、いずれ到達されるものとしてのプロセスではない。決まった方向に向かわない、場面により変化するアイデンティティがあり、それを経験する過程が、本稿における「アイデンティフィケーション」である。

文 献

綾部恒雄（監修）

2000 『世界民族事典』東京：弘文堂。

大杉高司

2001 「非共同性による共同性へ／において」杉島敬志編『人類学的実践の再構築——ポストコ

- ロニアル転回以後』 271-296 頁 京都：世界思想社。
- コール, W. O. ・ P. S. サンビー
 1986 『シク教—教義と歴史』 (溝上富夫訳) 東京：筑摩書房。
- シング, コウル N-G.
 1994 『シク教』 (高橋堯英訳) 東京：青土社。
- セルトー, M.
 1987 『日常実践のポイエティック』 (山田登世子訳) 東京：国文社。
- 西井京子
 2006 「序章 社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ」 西井京子・田辺繁治編『社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ』 1-29 頁 京都：世界思想社。
- 保坂俊司
 1992 『シク教の教えと文化—大乘仏教の興亡との比較』 東京：平河出版社
- ホール, S. ・ P. D. ゲイ
 2001 『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』 (宇波彰監訳) 東京：大村書店。
- 松田素二
 2004 「変異する共同体—創発的連帯論を超えて」『文化人類学』 69(2): 247-270。
- Appadurai, A.
 1996 *Modernity at Large*. Minneapolis: University of Minnesota.
- Kearny, M.
 2004 The Anthropology of Transnational Communities and the Reframing of Immigration Research in California : The Mixtec Case. In Bommers, M. and Morawska, E. (eds), *International Migration Research: Construction, Omissions and the Promises of Inter-disciplinarity*, pp. 69-94. London : Ashgate.
- McLeod, W. H.
 1989 *Who is a Sikh?* New Delhi: Oxford University Press.
- Shukla, S.
 2001 Location of South Asian Diasporas. *Annual Review of Anthropology* 30: 551-572.
- Tatla, Singh, Darshan
 1999 *The Sikh Diaspora: The search for statehood*. London: UCL Press.
- Thapan, M. (ed.)
 2005 *Transnational Migration and the Politics of Identity*. New Delhi: Segal Publications.
- 〈インターネット〉
- Census of India
http://censusindia.gov.in/Census_And_You/religion.aspx
- Census GIS India
http://censusindiamaps.net/page/Religion_WitzMap1/housemap.htm